2006 年 2 月 3 日

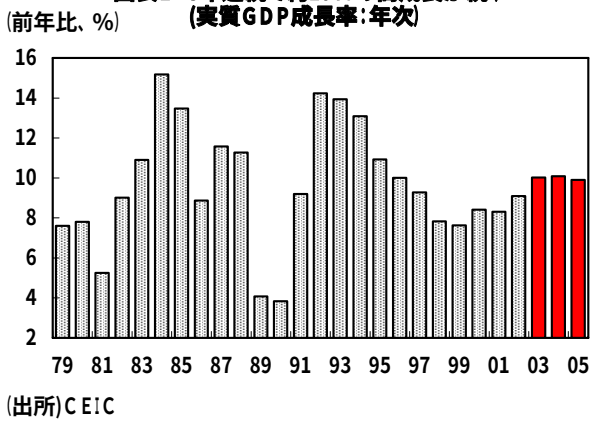
2006 年の重要課題は粗放的成長モデルからの転換

～高成長持続の一方で生産性の伸びの鈍化傾向が続く

2005 年の実質ＧＤＰ成長率は前年比 9.9%

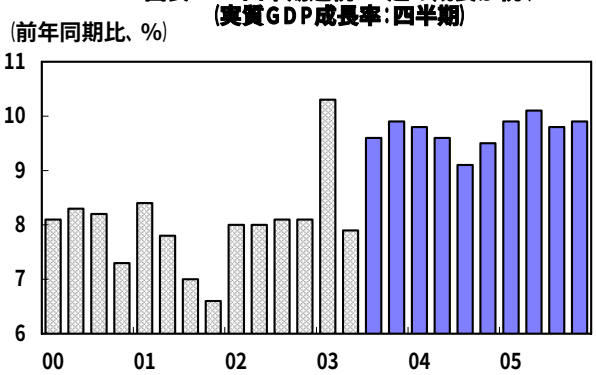
国家統計局の発表によれば、2005 年の中国の実質ＧＤＰ成長率は前年比 9.9%であった。これで 2003 年（同 10.0%）、2004 年（同 10.1%）と 3 年連続でほぼ 10%の高成長が続いたことになる（図表１）。四半期ベースでは 2003 年 7～9 月期以降 10 四半期連続で前年同期比 9%超の成長が続いており、中国経済の勢いにはいささかの衰えも見られない（図表２）。

図表1．3年連続で約10%の高成長が続く
(実質GDP成長率：年次)



(出所)CEIC

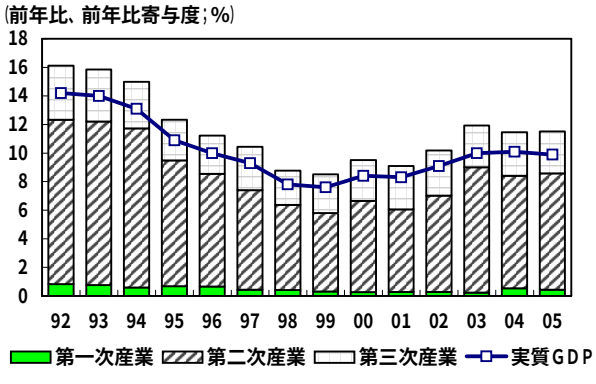
図表2．10四半期連続9%超の成長が続く
(実質GDP成長率：四半期)



(出所) CEIC

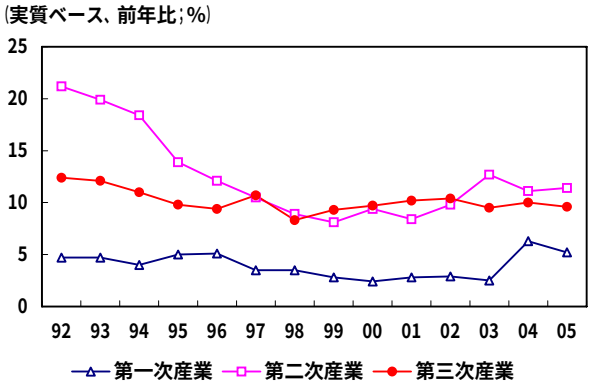
高成長の牽引役は 2003 年以降、前年比二桁台の拡大が続く第二次産業（工業部門）である。また、2004 年、2005 年については第一次産業（農業部門）もそれまでの前年比 3%前後から 5～6%に成長が加速しており、若干の成長率押し上げ要因となっている（図表３，４）。

図表3．高成長の牽引役は第二次産業（工業部門）



(注) 実質値はGDP指数に基づく当部試算値。誤差項があるため
各産業の成長率寄与度の合計値と実質GDP成長率とは一致しない。
(出所) CEIC

図表4．第二次産業（工業部門）の高い伸びが続く



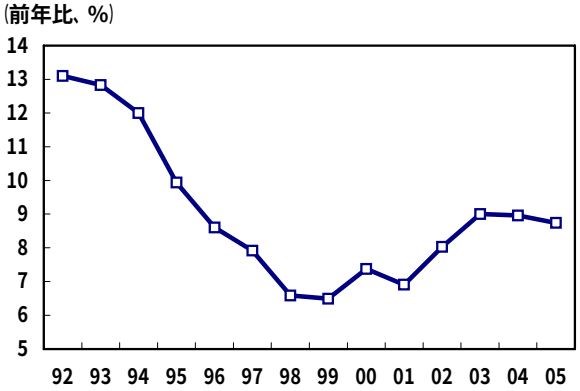
(注) 実質値はGDP指数に基づく当部試算値。
(出所) CEIC

高成長持続の鍵は粗放的成長モデルからの転換

2006 年についても内外需の堅調を背景に第二次産業を中心に拡大傾向が続くと見られる。ただし、ひとつの懸念材料は足元、生産性の伸びに鈍化傾向が見られることである（図表５）。2004 年までの産業別統計を見ると第一次産業で生産性の伸びが大幅に改善する一方で、第二次、第三次産業で生産性の伸びの鈍化傾向が見られる（図表６）。

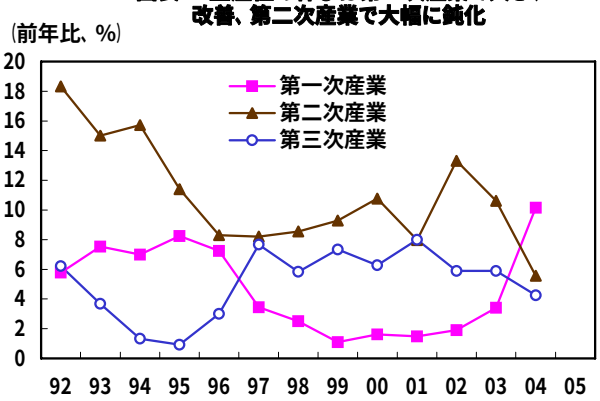
こうした状況は、成長持続のために成長の「質」を高めることが必要であること、すなわち「粗放的成長モデル」からの転換が中国経済にとって重要な課題であることを示唆していると考える。

図表5．生産性の伸びの鈍化傾向が続く



(注) 生産性＝実質ＧＤＰ/就業者数。実質ＧＤＰ値は当部試算値。　(出所) ＣＥＩＣ他

図表6．生産性の伸びは第一次産業で大きく改善、第二次産業で大幅に鈍化



(注) 生産性＝産業別実質ＧＤＰ/産業別就業者数。　産業別実質ＧＤＰは当部試算値。　(出所) ＣＥＩＣ他

調査部　野田麻里子(mariko.noda@murc.jp)

※本レポートに掲載された意見・予測等は資料作成時点の判断であり、今後予告なしに変更されることがあります。